

氏 名	まつだ なおこ 松 田 奈緒子
学位(専攻分野)	博 士 ( 学 術 )
学 位 記 番 号	博 甲 第 5 3 8 号
学 位 授 与 の 日 付	平成 21 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 3 条第 3 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	工芸科学研究科 機能科学専攻
学 位 論 文 題 目	インテリア空間の自己化とその表出に関する研究
審 査 委 員	(主査)教授 福田民郎 教授 山本建太郎 教授 野口企由 准教授 鈴木克彦 宝塚造形芸術大学大学院教授 加藤 力

### 論文内容の要旨

住居の個室のインテリア空間は、そこに住まう人が自分の生活や好みに合わせて、その人が住みやすいように、住人自身の手で改善行為が行われる。こうした環境改善行為によって、そのインテリア空間は、その住人自身の空間に変質していく。この過程を、本論文では「空間の自己化」と言い表し、住まいにおけるインテリアの本質であると捉えている。

「空間の自己化」の過程は、心理的側面が深く関係し、真の住み心地の良さ・個性化・快適性に繋がっていくものである。こうした観点から、本論文は、「空間の自己化」の過程に着目し、インテリア空間と住み手の自己との対応関係について明らかにすることを目的としている。その上で、インテリア社会心理学という新しい研究・学問領域の存在の可能性に向けて、理論の構築を目指し、インテリア空間における自己化に関する実態調査と、インテリア空間の持つ社会心理的側面に対する概念化及びモデル化を提示している。

第1章では、目的や関連用語等の定義を行い、第2章では、文献調査を通じてわが国におけるインテリアの動向を明らかにし、現代をインテリア空間を通じた自己表現の時代と位置付けている。自己表現の手段は、身体を中心に、化粧、被服、そして生活空間へと拡がり、そこには、他者への意識や自己確認などの意味が含まれ、この身体的自己表現の拡がりに着目している。

第3章では、調査概要及び基本的な枠組みの設定を行い、調査手法としての写真投影法及びプロトコル分析の妥当性について述べている。また、調査対象者には幼少の頃からイス坐の生活に慣れ親しんだ初めての世代である70年代以降に生まれた若者の個室を選んでいる。

第4章では実態調査を通じ、インテリア空間における自己<sup>1</sup>の実態には男女の別、専門教育の有無によって、あるいは興味や<sup>2</sup>足度によってそれぞれ特性のあることを明示している。また、プロトコル分析からは6つの<sup>3</sup>言語ユニット<sup>4</sup>、(方針・機能・改良・感覚・日常・思い出)と3つの軸、①意識軸(主体-客体)②行為軸(能動-受動)③時間軸(現在-過去)をインテリア行為の背景にある意識として抽出し、その構造把握を行い、さらに、意識構造と自己の<sup>1</sup>の実態との関係について分析・考察を試みている。

第5章では、インテリア空間における他者性に関し分析・考察を試み、他者を意識することで、自己表出の実態やインテリア意識が異なることが明らかにしている。また、他者との差異が意識されて創られたインテリア空間は、住み手のインテリアに対する意識も高いこと

を実証している。

第6章では、精神に病みを持つ若者達とその人達が住まうインテリア空間との関係性について取り上げ、虐待された者とひきこもり者との間には、自己表出の実態やインテリア意識に差異があることを確認している。また、虐待された者のインテリア空間においては、「自分でない自分の自己化」が行われており、ひきこもり者においては、「自分がない自分の自己化」が行われているという実態を掴んでいる。こうした結果から、インテリア空間とは囲まれ、そして外部からは密閉された空間でありながら、それは他者と関連した事象、つまり「社会心理学的」に捉えることが出来るのではないかと主張している。

第7章では、これまでの調査研究を踏まえて、インテリア空間の自己化に関し、その具体的プロセスと意識の変容について概念化を試み、自己化の物理的プロセス、及び、自己化の心理的プロセスのモデル化の提示を行っている。また、インテリア空間に持ち込まれるモノの役割についても事例をもとに考察を行い、自己投影、応援・支援、自己目標、

自己明証、変身・虚勢、所属（伝達）、象徴、自己同一性、癒し・慰めの9つの要素を導き出している。これらは、空間の自己化を示すモデルとして捉えることが可能で、これらを抽出することによって、逆に、住み手とインテリア空間の持つ関係性のエッセンスが掌握可能であることを示している。これらは、さらに詳細な検証や実証が必要であると考えられるが、インテリア空間の自己化に対する構造把握の第一歩として意義のある成果を導き出している。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、住居の個室を対象とした空間と人間との対応関係について扱った研究である。人が自己の居室を住まいこなしていく過程を空間の自己化と称して、その行為や意味、あるいは意識構造等について解析を行っている。

研究背景は、戦後のわが国の住まいの実態と状況を踏まえたものであり、研究目的にあっても極めて現代的意義を持ったものと判断することができる。調査研究方法も写真投影法やプロトコル分析といった手法を取り入れており、その内容もインテリア領域において「インテリア社会心理学」と表現できる新しい学問領域の存在の可能性について提示したもので、その独自性は高く評価できる。特に、居住空間のインテリアは外からは窺い知れない世界でありながら、しかしそこは他者の眼差しによって影響を受けるといった視点を取り入れたことについては、独創的で、新たなる知見であると判断できる。

現在、インテリアの分野は、化粧や被服に次いで、人間の身近な自己表現の手段となっており、その身体的自己表現の拡がりの上にインテリア領域を位置づけようと試みる視点は、デザイン学分野に深く関連するものであり、この点においても新たなる見解が示されていると見ることができる。

とりわけ、インテリア空間とひきこもりや虐待といった精神病理との関連性についての調査研究にまで言及している点については、今後きわめて大きな研究の広がりを感じさせるものであり、更なる研究深化を期待したい。現在、この研究領域は未開拓ともいえる研究分野であり、論文の結論として、空間の自己化に関する構造化とそのモデルを提示していることは、評価できる。

詳細な調査に基づく論旨の展開、論拠の立脚点も妥当であり、こうした人間と空間との関係や深まりが、真の快適性や個性化につながるものであると明言しており、新たな知見を得たものとして価値ある集積であると認めることができる。

なお本論文の内容の一部は、申請者による下記の学術学会誌の査読論文 6 編として公表（筆頭で 5 件、連名で 1 件）。

- 1: 松田奈緒子、加藤力：空間の自己化過程にみられる表出特性、日本インテリア学会論文報告集 14 号、pp.37-45、2004. 3
- 2 : Matsuda Naoko, Kato Tsutomu : *A study on the Self-expression in Interior Space*, AIDIA JOURNAL, VOL.4, pp.49-54, 2004.11
- 3 : Matsuda Naoko, Kato Tsutomu : *Social Psychology of Interior*, AIDIA JOURNAL, VOL.5, pp.196-202, 2005.11
- 4 : 松田奈緒子、加藤力：「他者」がインテリア空間における自己表出に与える影響、日本インテリア学会論文報告集 17 号、pp.45-51、2007. 3
- 5 : Matsuda Naoko, Kato Tsutomu : *Social Psychology of Interior - Depression of Spirit and Interior Space*, AIDIA JOURNAL, VOL.7, pp.124-130, 2008.11
- 6: 加藤力、松田奈緒子：インテリア空間における社会心理学的考察、宝塚造形芸術大学紀要、2006 No.20, pp.103 - 115, 2007. 3